ＮＣＧＭの活動が分かる情報誌

Feel the NCGM Plus

国立研究開発法人
国立国際医療研究センター
NCGM通信

2024.9.19
Vol.12
6月～7月（季刊）

国際庭園には、四季折々の綺麗なお花が咲いています！
ボランティアの皆さんのおかげでいつもきれいなお花が咲いています

CONTENTS

04　武見厚生労働大臣がNCGMを訪問されました
NIID・NCGMの職員に対して訓示をいただきました

05　主なできごと
ベトナムのハノイ医科大学との共同臨床研究による連携強化のためのMOU締結
「ザンビア共和国のコレラ対応で日本人感染症専門家が活躍」～GOARN派遣帰国後報告会を開催しました～

08　センター病院診療科シリーズ
集中治療科・脳神経外科・小児科を紹介しています！

11　国際医療協力局グローバルヘルスレポート
在外職員奮闘記！！ インドネシア共和国　/ “規範セッター”という仕事

12　研修医の窓
漢方薬の使用について、研修医で勉強会を行いました！

6月19日、杉山前病院長退職記念講演が開催されました

2019年4月より病院長をお努めいただいた杉山温人前病院長におかれまして、本年6月末日をもってご退職されました。

6月19日、研修棟5階大会議室にて、長年のご尽力に感謝し、今後のご健勝を祈念する退職記念講演が開催されました。会場には、國土理事長をはじめ、満屋研究所長、杉浦臨床研究センター長、武井企画戦略局長らが出席したほか、杉山病院長の指導を受けられた多くの方々が参加しました。

開会の挨拶は、杉山前病院長と同級生でもある國土理事長が行いました。数々の功績に加え、NCGMの経営状態の改善にご尽力されたこと、これまでのご活躍を労うお言葉がおくられました。

杉山前病院長からは「私とNCGM24年間の軌跡」と題してご講演いただきました。24年間NCGMに携わってこられた中での出来事や経営問題、Covid-19対応等、幅広いお話をお伺いすることができ、NCGMの発展における杉山前病院長の貢献の大きさを知る機会となりました。杉山前病院長は結びに、「今後はNCGMで培った経験を活かして、生まれ育ててくれた地域に貢献していきたい」と述べられ、講演を締めくくられました。

講演後の懇談会は大変和やかな雰囲気で実施されました。最後には、感謝の意を込めて花束が贈られました。今後も杉山前病院長の益々のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

6/5、ハイブリッド手術室のお披露目会を行いました！

6月5日、ハイブリッド手術室のお披露目会を行いました。ハイブリッド手術室は、手術台と血管X線撮影装置を組み合わせた手術室で、より高度な医療への対応が可能となります。

令和5年10月中旬に工事を開始し、今年の5月末に機器調整を行い完成にいたりました。6月より順次運用を開始しています。

杉山前病院長の退任挨拶

2025年4月、「国立健康危機管理研究機構」として
あらゆる健康危機に対応し、国民の負託に応えます

NCGMは2025年4月に国立感染症研究所と統合して、国立健康危機管理研究機構と言う新たな組織に生まれ変わります。今後、センター病院は新機構の臨床面を支える重要な部門として、感染症のみならず災害を含めた、あらゆる健康危機に対して今まで以上に迅速に対応できる能力を磨き上げて、国民の皆さんのご期待にお応えしたいと考えています。

今年度のNewsweek社World's Best Hospitals 2024においてセンター病院は世界88位、国内6位にランクインしました。これで6年連続で選出されています。NCGMはこの評価に慢心することなく、ハイブリッド手術室の開設、脊椎外科の創設、ロボット手術の一層の充実など、体制整備に努めてまいります。

最後に私事にはなりますが、6月末をもって退任することになりました。5年3か月にわたる病院長在任期間中、皆さんには大変お世話になりました。今までのご厚情に深く感謝申し上げます。今後は新しい病院長を中心に皆さんのご期待に沿えるよう職員一丸となって全身全霊で取り込んでまいります。

今年度もNCGMをよろしくお願いいたします。

ウクライナ医師の研修を受け入れています

NCGMは、政府の医療協力の一つであるウクライナ医療者教育支援事業に協力しており、ウクライナからの研修生を受け入れています。3回目の受け入れとなる今回は3名の医師が来日し、5月20日に國土理事長を表敬訪問しました。センター病院の救急科・麻酔科で研修を行います。

5月28日、3名の医師からウクライナの医療事情（平時の医療提供体制、ウクライナの医師の専門領域とキャリア形成、戦争後の課題、個人的に経験したこと等）についてご発表していただきました。オンラインにて開催し、62名が聴講しました。

6月26日、武見厚生労働大臣がNCGMを訪問されました

令和7年4月1日の国立健康危機管理研究機構（JIHS）創設に向けて、武見厚生労働大臣がNIID・NCGMを訪問されました。

NCGMにおいては、REBIND検体保管倉庫、調剤室、ARISE事務局、特殊感染症病棟（DCC）を視察されました。視察後、意見交換および武見厚生労働大臣・NIID脇田所長・國土理事長の三者会談も行われました。

REBIND検体保管倉庫を視察する様子

調剤室を視察する様子

ARISE事務局を視察する様子

今回の武見厚生労働大臣による訓示では、まずJIHSの創設に向けて、背景の異なる二つの組織を組織再編し、一体化した組織として機能させることは、容易なことではなく、一般的に新たな組織を創設する際、５年後・10 年後の目指すべき将来ビジョンが組織全体に浸透していることが肝要となると示されました。

そして、特に心に刻み込んでいただきたい「組織再編の基本哲学」について述べられました。また、この９ヶ月間は、組織が生まれ変わるために最も重要な論点である、ガバナンスが強化された新機構の組織体系の在り方を中心に検討を行ってきたことを述べ、JIHSの組織体系のコアとなる「設計図」についてポイントを3つ発表されました。

職員に訓示する武見厚生労働大臣

① 「統括部門」を設置し、５部門構成とすること
② 「危機管理総局」を有事の司令塔に据え、「研究開発」、「医療提供」、「人材育成」、「情報システム」の横断的対応が必要な４部門が支える体系とすること
③ 有事のフェーズごとにチーム編成を柔軟に変更できる組織体系とすること

そして最後に、来年4月のJIHS創設に向け、「自覚と責任、そして誇り」を持っていただきたいと述べ、「JIHSの創設が、我が国の感染症対応力の強化を牽引し、世界の保健システムの向上に貢献し、感染症に不安を抱くことのない新しい世界を実現することを皆様と一緒に実行したいと考えています。」と強く訴えかけられました。

6月12日、ベトナムのハノイ医科大学との共同臨床研究による連携強化のためのMOU締結

（寄稿）インターナショナルトライアル部　レ マイ フオン

2024年6月12日、国立国際医療研究センター（以下「NCGM」）とベトナム社会主義共和国 ハノイ医科大学（以下「HMU」）は、共同臨床研究を中心とした両機関の連携強化を目的とした5年間のMOUを締結しました。

署名式には國土典宏NCGM理事長の代理として、和田耕治インターナショナルトライアル部長が出席しました。

協定期間は2024年から2029年までで、教員交流、合同会議、情報・資料の共有、研究プログラムの開発、その他の協力活動が含まれます。

会談では、NCGMとHMUは臨床試験分野における協力の可能性について協議しました。HMUはCOVID-19の臨床試験を実施するために日本の製薬会社と協力経験があります。両機関は、治療法や予防法を開発することにより緊急事態への対応能力を高めることの重要性を認識しました。また、NCGMはハノイ医科大学病院及び臨床薬理学センターを視察し、同病院における感染症の診療経験について貴重な見識を得るとともに、臨床試験を実施するためのHMUの能力とインフラが紹介されました。

■HMUの歴史

1902年に設立されたハノイ医科大学（HMU）は、ベトナムで最も古い大学の一つです。100年以上の歴史と継続的な発展により、HMUはベトナムを代表する医科大学としての地位を確固たるものにしています。HMUは以下のような素晴らしい学術インフラを誇っています。 1つの大学病院、ベトナム中部にある1つの大学分校、3つの学部、43の学科、2つの学校、そして2,300人以上のスタッフで構成されています。現在、同大学は97の病院や数千人の客員講師との協力関係を育んでいます。臨床試験の分野に関しては、HMUの臨床薬理学センターは、医薬品試験、ワクチン開発、生物学的同等性試験の実施において10年以上の経験を持っています。特に、日本の製薬会社のワクチン試験への関与や、PMDAのGCP（医薬品の臨床試験の実施の基準）査察の成功裏の終了などの貢献があります。

「ザンビア共和国のコレラ対応で日本人感染症専門家が活躍」～GOARN※1派遣帰国後報告会を開催しました～

（寄稿）国際感染症センター　国際感染症危機管理対応推進センター 高木 香苗

厚生労働省の委託事業「国際感染症危機管理対応人材育成・派遣事業」にて、国際感染症危機管理対応推進センター※2は、WHO GOARNを通してコレラ対応の臨床管理専門家として、ザンビア共和国へ5週間派遣された日本赤十字社和歌山医療センター感染症内科部の小林謙一郎医師をお迎えして、2024年4月24日に「GOARN派遣帰国後報告会」を開催しました。

当報告会には、日本国内のGOARNパートナー機関をはじめ国際協力職員や医療従事者など37名がオンラインでご参加くださいました。

小林医師からは、GOARN支援要請への応募から派遣までの流れ、コレラの状況、現地保健省のコレラ治療センター(CTC; Cholera Treatment Center)開設等の対応、医療現場の様子、世界保健機関(WHO)による物資支援や技術支援、ＷＨＯ支援による経口補水ポイント(ORP; Oral Rehydration Point)などの地域での取り組み、そして、臨床管理専門家の業務についての発表がありました。その中で、現地の人々の間にはコレラに対する差別・偏見も根強いため、教育啓発を行って行動変容を促して医療に繋げたり、更なるコレラ発生を見据えて現地医療スタッフのコレラ対応能力の底上げを図る取り組みが重要であると学びを共有下さいました。

質疑応答では、当時「国際協力機構(JICA)ルサカ郡総合病院運営管理能力強化プロジェクト(カシオペアプロジェクト)」のチーフアドバイザーを担っていた国際医療協力局の法月正太郎医師より、地域での高い死亡率については平時からの医療不信や偏見による治療受診行動の遅れや、重症化した場合の医療機関へのアクセスの悪さ等が要因として考えられることから、地域の医療受診行動を分析して対策の検討が必要であること、そして、ザンビアのような診察器具等が整わない中での対応は日本での災害等緊急時に活用できると提案くださいました。

PPE着脱方法を伝授

©小林　謙一郎（Ken-ichiro KOBAYASHI）

WHOが設置したCTC

©小林　謙一郎（Ken-ichiro KOBAYASHI）

新型コロナウイルス対応以来約2年ぶりとなる日本人GOARN派遣者の今回の報告会では、GOARN派遣についての最新情報を聞くことができる貴重な機会となりました。また、ザンビア共和国の保健省やWHOだけでなく、JICA等日本の機関との連携や情報共有が功を奏して、より包括的なコレラ対応となったと評価を受けました。

なお、ザンビア共和国でのコレラ対応支援要請は2024年5月で終了となりましたが、引き続き世界の健康危機対して感染症専門家による支援は必須となっています。

※1　GOARNは、**G**lobal **O**utbreak **A**lert and **R**esponse **N**etworkの略で、WHOが設立したネットワークです。このネットワークを活かし、感染症等健康危機に直面している国を技術的に支援するための「支援要請(RFA: Request for Assistance)」を全世界のGOARNパートナー機関(登録総数約270機関)に発出し、感染症専門家の派遣を行っています。

※2　弊センターは、厚生労働省の委託事業「国際感染症危機管理対応人材育成・派遣事業」において、WHO GOARNの活動を推進しています。

地域の経口補水ポイントの様子
©小林　謙一郎（Ken-ichiro KOBAYASHI）

WHO、JICA、現地医療者との
コラボレーション
©小林　謙一郎（Ken-ichiro KOBAYASHI）

ザンビア郊外の風景
©小林　謙一郎（Ken-ichiro KOBAYASHI）

センター病院診療科
シリーズ No.25

集中治療科

集中治療科は、様々な診療科と協調して診療を行うsemi-closed ICUであり、高侵襲度手術の術後管理、重症患者の全身管理に加え、CCU機能も担う総合ICUです。特定集中治療室管理料１を算定している日本集中治療医学会専門医研修施設です。人工呼吸管理（緊急挿管、安全な離脱と抜管）やECMO、IABP、CHDFそして2022年度からはImpellaなどといった高度医療を展開しております。診療科が展開する専門医療に対し、呼吸・循環・代謝・栄養管理といった点でサポートしております。また、RST（呼吸ケアサポートチーム）やNST（栄養サポートチーム）、RRS（院内急変対応チーム）といった多職種連携医療も展開し、他のユニットや一般病棟まで活動の範囲は及んでおります。これまでに、研修医等のローテーターは73名、集中治療専門医取得者は５名となりました。

早期離床・リハビリテーションと早期経腸栄養については、それぞれ加算もあり、リハビリテーション科、栄養科、そして我々スタッフが一丸となって特に力を入れて取り組んでおります。

6月からICUの夜間休日の診療体制が「宿日直」から「勤務」へと変更になります。これまで以上に多くの皆様にご助力をお願いすることになりますが、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

（集中治療科診療科長　岡本 竜哉）

センター病院診療科
シリーズ No.26

脳神経外科

当院は日本脳卒中学会による一次脳卒中センターの認定を受け、さらにその中から認定される一次脳卒中センターコア施設として地域の脳卒中診療に24時間365日対応しております。近年では低侵襲治療である脳血管内治療の症例数が増加しており、脳主幹動脈閉塞に対する血栓回収術、脳動脈瘤に対するコイル塞栓術、頚動脈狭窄症に対するステント留置術、硬膜動静脈瘻や脳動静脈奇形に対する塞栓術なども積極的に行っております。

また、治療可能な認知症の原因疾患として知られる水頭症や慢性硬膜下血腫などの疾患に対しても積極的に治療を行っております。さらに、近年注目されている脳卒中後や脊髄損傷後に起こる痙縮に対するバクロフェン髄注療法にも取り組んでおり当院や近隣のリハビリ施設と連携し治療を行っております。軽症症例から重症な症例まで、時間を問わずお受けしております。いつでもお気軽にお問合せください。

（脳神経外科診療科長　井上 雅人）

センター病院診療科
シリーズ No.27

小児科

小児科は、1945年に当院が国立東京第一病院として開設された時から続く長い歴史をもった診療科です。

“地域小児医療への貢献”と”高度医療・研究の実践”を両輪として、乳幼児健診や予防接種から、呼吸器・消化器・尿路感染症、川崎病などの急性疾患、さらにはアレルギー・免疫疾患や血液・腫瘍、循環器、神経・精神疾患など慢性・専門疾患の診断、治療まで幅広く対応し、「こどもの総合診療医」たるべく日々の診療を行っています。遺伝子治療や造血細胞移植などの高度医療にも対応し、また小児がんを中心とした様々な国際医療協力や多くの臨床研究への参加も行っています。

医師、看護師に加えて、保育士、ホスピタルプレイスペシャリスト（HPS）、小児臨床心理士、病棟薬剤師、理学療法士など多職種チームを編成し、こどもたちの成長と発達をサポートするための最善の治療と環境を追求しています。昨年8月から小児科病棟（6東病棟）も再開棟となり、現在は以前と同様の小児科診療をフル稼働しています。新宿区からの業務委託でおこなっている”しんじゅく夜間こども診療室”は新宿区医師会や周辺医療機関の先生方の協力も得て、365日休みなく準夜帯の小児一次診療を行っています。

（小児科診療科長　望月 慎史）

「小児科外来のお部屋をリニューアル！」

診察室のドアを開けると『空』『海』『宇宙』など、お部屋ごとに色々な世界が広がります。赤ちゃんとママのお部屋（授乳室）は木に囲まれた森の中のイメージになっています。

「動物もどこかにいるかな？」どこが新しく変わったかゆっくり探してみてくださいね。

（子どもの療養環境に関するワーキンググループ一同）

5/28　母校･都立戸山高校にて講演を行いました

（寄稿）国際診療部 部長 日野原千速

NCGM近隣にある私の母校、東京都立戸山高等学校にて講演を行いました。「チームメディカル（医学部志望のグループ）」のミーティングで講演をする機会をいただき、高校１～３年生の合計56名に参加いただきました。３０年以上も前、医師を目指した当時の気持ちや医師になった経緯、また新宿の外国人医療の状況について話しました。

学生時代とは、校舎も様変わりし、面影はありませんでしたが、当時を懐かしみ、また、はつらつとした現役の高校生たちとのひと時を過ごしました。

講演を行う日野原医師

国際医療協力局グローバルヘルスレポート
在外職員奮闘記！！　　インドネシア共和国　Vol.20

国際協力機構（JICA）インドネシア共和国 感染症早期警戒対応能力強化プロジェクト

チーフアドバイザー 坪井 基行（医師）

2023年10月にインドネシア共和国の首都ジャカルタに着任して、もうすぐ9ヶ月が経とうとしています。ムスリム人口が世界最大といわれる国で、断食月（ラマダン）や断食明け大祭（レバラン）など特有の行事を経験するとともに、地域毎にそれぞれ特色のある文化の多彩さに未だに驚くことも多い日々を過ごしています。

本プロジェクトでは、保健省や3つのプロジェクト対象州（バンテン州・東カリマンタン州・南スラウェシ州）において感染症サーベイランスやその対応能力が強化されることを目的に活動を進めており、保健センターレベルでのサーベイランス担当者らの理解を深めるための報告・対応支援ツールやオンライン教材作成から、保健省レベルでのリスク評価に関する標準業務手順書作成等、幅広く活動を実施しています。

時には、プロペラ機で
地方のサーベイランス体制における課題を
評価しに行くこともありました

国際医療協力局グローバルヘルスレポート “規範セッター”という仕事 Vol.10

この度、WHOアカデミー諮問委員会の一員として活動を始めました。

WHOアカデミーとは、フランスのリヨンに拠点を置く、世界各地の全ての層の保健人材を対象とした、総合学習プラットフォームです。今年12月に完成予定のリヨンの施設では世界トップクラスのシミュレーション施設を配備し、最先端の技術を駆使し、科学的根拠にもとづく情報も遠隔教育やeLearningの教材として提供されます。世界６地域から集まった11名の諮問委員会の委員には、この教育活動をより効果的にするための助言が求められています。

先日のオンライン会議では「最新技術を活用した最適な学習デザインや教育方法」等、３つのテーマで議論しました。任期は２年です。

WHOアカデミー
諮問委員会 委員
井上 信明
(国際医療協力局 人材開発部
研修課課長/医師)

※井上医師は、現在、
埼玉医科大学総合医療センター小児科 教授を努めています。

研修医の窓

漢方薬の使用について、研修医で勉強会を行いました！

センター病院　初期臨床研修医1年目　米田アリシア

5月20日、外部から講師を招き、1.2年目の研修医で漢方薬の勉強会を行いました。病棟でも外来でも汎用される、大建中湯・五苓散・抑肝散などについて、安全性・作用機序・主な使用方法を解説して頂きました。

漢方薬は正しい適応、使用方法を理解していれば、患者さんの困っている症状に、より細やかに対応できる便利な薬剤です。一方で、漢方薬について十分な授業を行なっている医学部は少なく、このような機会を活かして、診療に役立てようという趣旨の勉強会でした。

EBMに基づく処方などの科学的なトピックだけでなく、漢方に半信半疑の患者様にどのように説明するか、味が苦手だといわれた場合の対応など、すぐに応用できる知識を身につけることができました。

今後も同様の機会を設け、より診療知識を身につけていきます。

本号に掲載の集合写真等は、撮影時のみマスクを外しています。

企画・発行：
NCGM 広報企画室

https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM_Plus/index.html
バックナンバーはこちらからご覧いただけます。